

# 一時輸出が決定!

## 中国参入で競売に

長年待たれていた象牙の一時輸出がついに決定した。以後9年間、取引禁止の条件付きだが、出荷量は上乗せされて合計108トンに。しかし中国も引き受け国として参入し、今後は日本との競売で象牙の行方が決まる。

(写真は99年7月に一時輸入された様子)



スイスのジュネーブで開かれていたワシントン条約締約国会議(絶滅の恐れがある野生動物物の国際取引に関する条約「CITES」)の常設委員会会議で、7月15日、アフリカ象の象牙108トン(日本と中国に限り輸出することが、正式に認められた)。

今回の象牙取引は、アフリカ

南部の4カ国(南アフリカ共和国、ボツワナ、ナミビア、ジンバブエ)が管理する在庫の象牙を、1回限定で海外に輸出するというもの。実施の時期や価格などは現時点では未定だが、日本の輸入が実現すれば、99年に50トンが一時輸入されて以来9年ぶりとなる。

今回の一次輸出は印章業界に

とっては恵みの雨。というのも象牙取引に関して、日本は何度も憂き目を見てきたからだ。

### 宙に浮いたままの象牙60トン

象牙の国際取引が全面禁止になったのは89年。これは絶滅の恐れのある野生動物を、乱獲から保護するために取引を規制する、という国際条約(CITES)によるものだった。

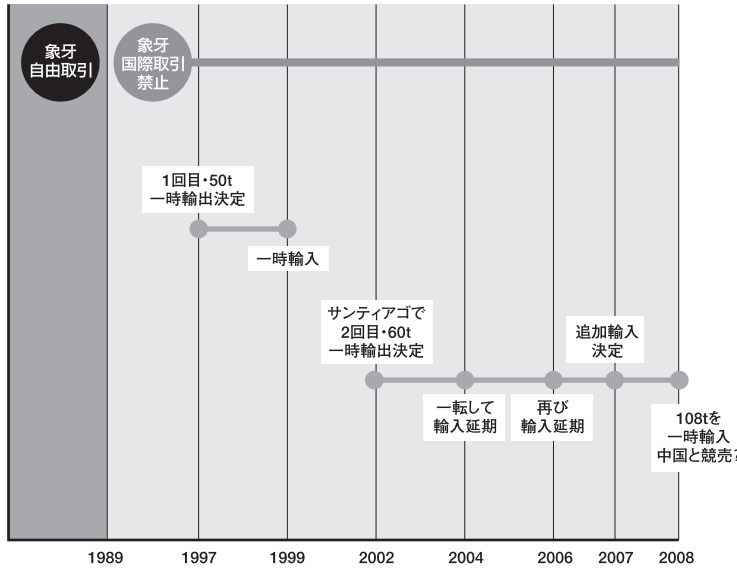
しかし、それから10年後の99年に一時的ではあるが輸出が認められ、ボツワナ、ナミビア、ジンバブエから合計50トンの象牙が日本に届いた。これは何も、アフリカ象保護の国際的気運が消えたからではない。南部アフリカの貧しい国々では象を保護するための経済的な余裕がなく、資金稼ぎが必要だったからだ。今回の取引同様、老衰など自然死の象から採った象牙に限られていた。

02年には、南アフリカ共和国、

# 9年ぶりの象牙

## 108トンに増量なるも

象牙取引年表



ボツワナ、ナミビアの3カ国が提案していた2度目の一時輸出が決定。遅くとも2年後には60トンの象牙が日本に入ってくる。在庫が底をつきはじめた象牙印材メーカーはホツと胸を撫で下ろした。

ところが04年3月、その一時輸出は直前で延期になってしまふ。理由は、密輸や違法販売の有無をチェックする機関「M I

KE」の調査報告が遅れたこと。もう1つは、受け入れ側である日本の国内管理体制が不十分であるとCITESが判断したため。

そこで日本は、国内の象牙流通の管理体制強化を始めた。特に全国の印章小売店で組織される全日本印章業組合連合会では、加盟店の象牙管理台帳の整備や、店頭の象牙扱い事業者シ

ールの掲示などの呼びかけを強化。国内の象牙印材流通の整備に力を注いだ。その努力が実を結び、常設委員会は日本の管理体制に高い評価を与えている。

しかしこうした取り組みにも関わらず一時輸入は実現しなかった。結局象牙60トンは宙に浮いたままだった。

進展があったのは07年6月のCITES本会議。象牙60トンにさらに追加して一時輸出を行うという結論が下されたのである。「実現した場合、その後9年間の輸出は禁止」という厳しい条件付きだが、ようやく一時輸出が認められた。

こうして経緯を振り返ると、日本の象牙輸入は89年の全面禁止から数えてわずか1回。今回のニュースを業界がいかに待ち望んでいたかわかる。

### 中国引き受けにはウラがある?

ところで輸出は現実的なものとなったが、07年6月の決定から今回の承認まで1年近くも待たされることになった。

このタイムラグが生じたのはアフリカ諸国の2つの思惑があったからと見られている。

1つ目は出荷増量を狙ったため。当初は60トンだったが、南部アフリカ諸国がさらに在庫の象牙を輸出したいという要望を申し出た。これは前述の「9年間の取引禁止」に関係している。つまり当面輸出禁止になるなら駆け込みでもっと売っておきたい……というわけだ。結局、ワシントン条約に加盟している、南アフリカ共和国、ボツワナ、ナミビア、ジンバブエの4カ国が管理する、計108トンの在庫の象牙が対象となった。

2つ目は中国を引き入れるための時間稼ぎを図ったのでは、という見方。

日本政府の関係筋は「引き受け国が今までは日本だけだったため、南部アフリカ諸国は安く買いたたかれたという不信を持っている」と話す。中国と競わせることで、人札額を跳ね上げ、実入りを多くしようとしているのでは? というのだ。象牙メーカーも、

「9年間象牙禁止が続いていたため、原産国側も『高く売らなれど』と躍起になっているかもしれない」(㈱タカイチ・高市雅也社長)。

ともあれ早く売りたいはずのアフリカ諸国が先延ばしを受け



99年7月に象牙が陸揚げされた時の写真。虫喰いなどで使えない粗悪なものも多く、今回は倍増したとはいえ良質かどうかは、競売が行われるまで分からない。

入れている間に、中国政府は国内の象牙取引の規制・管理を徹底した。実際、今年に入り、中国国内では象牙密輸摘発のニュースが相次ぎ、「管理体制の強化」を常設委員会にアピール。結果、今回の一時輸入で中国が

引き受け国となることが認められた。中国側から見ても象牙を求める理由がある。それは国内の景気上昇。現在、中国では国内消費が高まり、高級品である象牙の市場が形成されている。外交

上、国際社会で認められるためにも密輸品ではなく正規の象牙が欲しい。

しかしこの中国参入は、日本にとつて頭の痛い問題になる。中国での象牙用途はほとんどが美術工芸品であるため、印章を用途にするよりも小売値が高い。つまり、アフリカからの販売価格を競売で決める場合、中国側は日本よりも高額で入札する可能性があるからだ。

## 暴騰か横ばいか 気になる印材価格

事情はどうあれ、日本・中国の競売で象牙の行方が決まる。日本としては、輸入解禁にあたり迅速な対応が求められるが、今後いつ日本に象牙が届くかは不透明な状況だ。象牙メーカー各社にも新聞報道以外、具体的な情報が入ってきていないように、

「象牙組合の中でも動きがない。前回は日本だけが対象だったからスムーズに取引が進んだが、ひよっとしたら、また先延ばしになるかもしれない」（陶イケウチ・池内隆宏社長）  
「日程の折り合いがつかないのではないか。年内の実現は難しいのでは？」（陶ワイズ・渡部正英社長）

「……と対応のしようがなく、各社とも頭を抱えている。それでは象牙の日本着が不透明な中で、果たして国内の象牙印材の在庫は持つのだろうか？

象牙印材メーカーの状況は、「ほとんど枯渇している。大半のメーカーも1〜2年象牙が持つなんてことはないだろう」（陶ワイズ・渡部正英社長）  
「在庫を他のメーカーと比較できないが、あまり持っているほうではないだろう」（陶イケウチ・池内隆宏社長）

……と、樂觀できない状況。しかし象牙の全面禁輸から19年が経つ。最後に一時輸入してからも9年経過しており、在庫が逼迫しない方がおかしい状況だろう。

ただし今後の価格動静について、メーカーの見方は、「この不況ではこれ以上値上げはできない」（陶タカイチ・高市雅也社長）。

もちろんこの状況で値下がりすることは考えられないし、在庫がいよいよ枯渇すれば価格暴騰の可能性もあるが、当面、象牙の価格は冷静な動きとなりそうだ。（終）